

特集：日墨修交 400 年

## 日本とメキシコの 400 年の関係を振り返る

国本 伊代

2009 年は、日本とメキシコの最初の接触から 400 年、近代の外交関係を樹立した日墨修好通商航海条約の批准から 120 年という年に当たり、それらを記念する多様な催しが両国で開催されている。ただしこの 400 年の関係には長い空白期間が存在するだけでなく、両国が緊密な関係を築くのは 20 世紀後半になってからである。以下では、この 400 年の関係を 4 つの時期に分けて要約したい。

### (1) 16 世紀末から 17 世紀初期の接触

日本とメキシコの関係は、スペインの植民地フィリピンの総督代理であったロドリゴ・デ・リベロが乗った船サンフランシスコ号がメキシコに向う途中で現在の千葉県御宿の沖合で座礁し、地元の人びとの温かいもてなしを受けた 1609 年の事件で始まったとされる。しかし実際にはスペインがフィリピンを征服し、植民地体制を築く過程ですでに始まっていた。

スペインの植民地ヌエバ・エスパーニャ副王領であった 16 世紀半ばのメキシコは、スペイン人のアジア探検の基地であった。フィリピンが征服され、1565 年にメキシコ太平洋岸への帰路が発見されたことでスペインのアジアへの進出が本格化すると、メキシコはその後 250 年間つづくことになるマニラ・ガレオン貿易と呼ばれた東洋貿易の中継地と

なった。アカプルコとマニラを結ぶガレオン船が新大陸から東洋へ銀を運び、マニラからアカプルコへは絹、香料、その他の奢侈品を輸送し、メキシコを經由して新大陸のその他の地域およびスペインへ輸出された。

特定の商人が独占したこの東洋貿易は支配層に莫大な富をもたらし、19 世紀に独立したメキシコがその再開を常に熱望したほどであった。しかしこのマニラ・ガレオン貿易船はその初期にあってはその豊富な積荷を狙う中国や日本の海賊の襲撃の的となり、また台風によってしばしば難破し、不安定で危険な交易でもあった。

一方この時期の日本は、1543 年のポルトガル人の種子島漂着、1549 年のフランシスコ・ザビエルの到来にはじまるキリスト教の布教活動、豊臣秀吉の全国統一を経て、東アジアへの勢力拡大を図っていた。1592 年に秀吉はスペイン植民地フィリピンの総督に対して日本への服従と貢物を要求した。1596 年にガレオン貿易船が土佐（現在の高知県）の浦戸に漂着した事件では、難破した船の積荷が没収され、キリスト教布教によるスペインの日本征服への危機意識からキリシタン弾圧が加速された。

南蛮貿易を熱望する九州の諸大名が積極的に受け入れたキリスト教布教活動は、宗派間の競争の激化の中で宣教師たちがみせた行動から布教が日本国土の征服を目指すのではな

いかという警戒心を日本人に抱かせた。しかし1598年に秀吉が死去し、1600年の関が原の合戦を経て日本を統一した徳川家康は、スペインの鉱山技術を中心とした進んだ技術の伝授と交易を強く望み、布教活動を黙認して宣教師を仲介役として利用した。このような過程で発生したのが1609年8月のビベロが乗船していたサンフランシスコ号の千葉県御宿の海岸への漂着にはじまる一連の日本とメキシコとの交渉である。リベロは江戸城の将軍徳川秀忠および駿府に隠居する家康と会見した。家康は、メキシコとの貿易のほかに、太平洋を航海できる船の建造技術と銀の精錬技術を学ぶためにメキシコからの専門技術家の派遣を要望した。

家康の命を受けて三浦按針（ウィリアム・アダムス）が建造した帆船サンブエナベントゥーラ号で1年ぶりにメキシコへの帰途に着いたロドリゴには、京都の商人田中勝介をはじめとする23人の日本人が同行した。この日本側の好意に対して、メキシコ側は翌1611年に答礼の使者として副王特使セバスティアン・ビスカイノを日本に派遣した。しかしビスカイノの日本派遣は、単なる返礼の使者ではなく、日本の沿岸を探検し、「金銀の島々の発見」を探査する密命を帯びていた。それに失敗したのちビスカイノは、仙台藩伊達正宗がローマに派遣する支倉常長の率いる慶長使節団を伴ってメキシコに戻った。

150名の日本人からなる慶長使節団は、1613年10月に現在の石巻港からサンファン・パウティスタ号でメキシコに向かい、1614年1月にアカプルコに到着した。支倉一行はクエルナバカを経てメキシコ市に到着し、副王と会見して使節の目的・通商希望を説明したのち、支倉は通訳をつとめたソテロ神父ら宣教師と若干の従者を連れてベラクル

スへ向い、キューバ、スペインを経て目的地ローマに1615年に到着した。そして支倉が同じルートでメキシコ市に戻り、マニラを経由して日本に帰国したのは出発してから7年後の1620年であった。この間に日本の政治情勢は大きく変化し、キリスト教は排斥され、日本は鎖国への道を歩み始めていた。

## （2）250年後の日墨間の国交樹立

近代の日墨関係は、1888年に締結された「日墨修好通商航海条約」によって開始された。それまでのおよそ250年の間、日本とメキシコの関係は非常に限定的な接触にとどまった。メキシコの東洋貿易の拠点として繁栄したマニラを経由してメキシコに輸入されたわずかな日本製品（伊万里焼き、刀甲冑など）、日本の漁船が漂流してカリフォルニア半島に漂着した事件などにすぎない。この間、日本は鎖国状態にあった。

一方、マニラ・ガレオン貿易はメキシコの独立運動中の1815年までつづき、東洋の物産と人が太平洋を横断してメキシコに入っていた。メキシコ市には中国人街が出現し、現在の首都の憲法広場にあったパリアンという公設市場では東洋からもたらされた品々が売られていた。

独立国家となったメキシコが、潤沢な利益が期待された東洋貿易を再開させるのはそれから半世紀以上も後のことである。この間のメキシコは、独立後の政情不安と混乱、メキシコ・アメリカ戦争（1846-48年）、1854年に始まるレフォルマ革命、3年に及んだ内戦、スランス干渉戦争とマキシミアン帝政（1864-67年）を経て、やっと1870年代になって国内政治を安定させた。一方、19世紀半ばの日本は、鎖国政策を欧米列強によって力づくで破棄させられ、明治維新を経て近代日本の夜明けを経験しようとしていた。

このような日本とメキシコが再び接触するのは、国交がまだ樹立されていない日本へメキシコの金星観測隊が派遣された1874年である。この年は地球が金星にもっとも接近した年で、天文学の先進国メキシコはフランシスコ・ディアス＝コバルピアスが率いる金星観測隊を日本に派遣した。ディアス＝コバルピアスは金星の観測記録だけでなく、滞在期間に自分の目で見た明治初期の日本の姿を詳細に報告した。この報告書（原題『天体観測日本旅行記』；邦語訳『ディアス・コバルピアス日本旅行記』）は、国内政治を安定させたポルフィリオ・ディアス時代（1876-1911年）のメキシコの近代化主義者たちの日本への関心を高めた。メキシコがスペイン植民地時代に経験した豊かな東洋貿易を復興する機運が政府内に高まり、1882年に中国と日本に対して国交と貿易関係の樹立を目指す接触が、外交団の駐在するアメリカの首都ワシントンで行なわれた。しかしこの時の中国も日本もまだそれを受け入れる状態になく、とりわけ当時の日本は江戸時代末期に締結を強いられた欧米列強との不平等条約の改正交渉で手一杯の状態であった。

1887年に、突如として日本がメキシコに国交樹立に向けた接触を行なった。急遽ワシントンを舞台にして二国間で外交交渉が行われ、1888年11月30日に「日墨修好通商航海条約」が締結された。この条約の意義は、メキシコにとっては潤沢な利益をもたらすと期待された東洋貿易の復興であり、近代メキシコの対外政策の拡張の一環であったことである。その目的のために、メキシコは日本が要求した完全に平等な条件を受け入れた。

一方、日本にとっては、明治時代の最大の外交課題であった不平等条約の改正交渉の過程で成立した最初の完全な平等条約となったことである。こうしてメキシコ側の東洋貿易

の確立への希望と日本側の不平等条約改正への突破口としようとする外交戦略によって、この平等条約は締結され、近代日墨関係の出発点となった。

### （3）近代日墨関係の展開

以上のようなメキシコ側の思惑と日本側の戦略は、必ずしも成功したわけではなかった。なぜなら両国の貿易はメキシコが期待したような利益をもたらさず、拡大もしなかった。そして平等条約は、すでに新たな国際情勢の中で不平等条約の改正に応じようとする列強諸国の変化があり、日本が目指した不平等条項を撤廃するための「前例」とはならなかったからである。

国交を樹立した近代日墨両国の関係の中心となったのは、経済繁栄期に入ったディアス時代の国土開発と労働力不足に応じた日本側のささやかな資本進出と労働移民の送り出しであった。

外国人に土地譲渡を行なって国内開発を進めるディアス政府の政策に応じた日本の榎本武揚を中心とする政財界グループが、1897年にメキシコ南部のチアパス州にコーヒー・プランテーションの経営を目的として土地を取得し、開発要員として34名の日本人を送り出した。このプロジェクトはコーヒー産業および現地事情の情報不足から早々に失敗した。

開発要員として送り込まれた人々は現地に放置されたが、独自の共同体組織を結成して現地に留まり、苦境をのり越えて現存する南部メキシコの日系社会の礎となった。一方、メキシコの労働力不足に悩む鉱山、熱帯プランテーション、鉄道建設の現場への日本人労働者の送り出しは、最初の集団移民が送り出された1901年から移民が中止された1907年までのわずか7年の間に約1万

人にのぼった。そして7年の移民送り出しで日本人のメキシコ移住が中止されたのは、日米関係の延長線上で起こったことである。

ハワイへの労働移民の送り出しに始まる日本人のアメリカ移住は、19世紀末にすでに排日運動を発生させ、日本からの契約労働移民の直接入国が難しくなると、メキシコへ入国した日本人労働者が地続きの国境をつぎつぎと不法に越境していくようになり、問題となった。その結果、1907年に締結された日米紳士協定において、日本は自発的にアメリカと国境を接する国への日本人の移住を禁止することを約束した。このようにして新たな日本移民の渡航が禁止されたメキシコでは、主としてアメリカとの国境近くの主要都市と首都に日本人が散在し、その後は呼び寄せ移民など入国が許された少数の日本人がメキシコに渡航した。

1910年に勃発したメキシコ革命、革命中に経験したさまざまな混乱と苦境、第2次世界大戦中のメキシコの連合国側への参戦と敵国人強制収容政策などを経て、戦後の日本人社会は強制収容地点となった首都メキシコ市とグアダハラハラ市に集中することになった。

#### (4) 友好関係の礎と21世紀の友好関係

第2次世界大戦で敗北した日本は、1951年9月のサンフランシスコ講和会議で49カ国と平和条約に調印して国際社会に復帰した。この条約をイギリスに次いで2番目(1952年3月)に批准したのがメキシコである。

国交回復と同時にメキシコ政府は戦時中に凍結した日本公使館の資産を日本側に返還し、これを基にして1956年に日墨協会が設立され、文化交流の場として日墨文化会館がメキシコ市南西部に建設された。第2次世界大戦中にさまざまな制約を受け、戦後は首都

圏に集中したメキシコの日系社会は、高等教育を受けた二世たちの成長と社会進出、日本からの企業進出ともあいまって、存在感を高めていった。

戦後の両国の関係は、1954年の日墨文化協定、1957年の日本貿易振興会(JETRO)によるメキシコ市における第1回日本産業見本市の開催、1959年の岸信介首相のメキシコ訪問、1962年のロペスマテオス大統領の訪日などによって、ほぼ同時期に出現した両国の高度経済成長時代に緊密な関係を築いていった。東京オリンピックが開催された1964年に日本メキシコ商工会議所がメキシコで発足し、メキシコ・オリンピックが開催された1968年の1月に日本メキシコ通商協定が調印され、1971年には相互に100名の若者を交流させる日墨研修生学生等交流計画が発足した。1977年には、日本とメキシコの両国の文部省教育基準を満たした日墨学院が開校され、現在では幼児部・小・中・高校課程を有するメキシコ市内の名門私立学校へと発展している。

21世紀における日本とメキシコの関係は緊密で多面的である。2004年に締結された自由貿易協定を核とする経済連携協定(正式名称「経済上の連携の強化に関する日本国とメキシコ合衆国との間の協定」)による緊密な経済関係の構築をはじめとして、多様な芸術・芸能分野における芸術家の派遣と受入れ・上演・展示、学術研究者の交流、各種団体や姉妹都市間の交流プログラムなど、日本とメキシコの間で交わされるイベントなどをまとめることは不可能なほど活発である。

これらの中で、長期にわたり多くの分野における日墨交流の基盤の一部となっているといっても過言ではないのが、先に挙げた政府交換留学制度であろう。その後規模が縮小されたとはいえ現在まで継続されており、両国

間の友好関係を担う人材を育ててきた。メキシコ側から派遣される若者は理工科系が中心であるのに対して、日本からは学部学生と社会人を含めた幅広い若者が選抜されてメキシコの大学で学んできた。これらの留学生は帰国後多様な分野で活躍している。

一方、メキシコ市にあるメキシコ大学院大学のアジア・アフリカ研究センター日本研究科（大学院コース）は、ラテンアメリカにお

ける唯一の博士課程を有する日本研究者養成機関となっており、メキシコに限らずラテンアメリカ諸国の日本研究者を養成してきた。そしてこれらの日本研究を支援している国際交流基金の役割も大きい。

以上のように、日本とメキシコの400年の関係は、21世紀に入って急速に多様で緊密な関係へと発展し、両国の絆は確固たるものになっている。

（くにもと・いよ 中央大学名誉教授）

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

## 『メキシコの歴史 — メキシコ高校歴史教科書世界の教科書シリーズ 25』

ホセ＝デ＝ヘスス・ニェト＝ロペス、マリア＝デル＝ソコロ・ベタンコート＝スアレス、  
リゴベルト・ニェト＝ロドリゲス、タニア・カレニョ＝キング 国本伊代監訳、島津 寛共訳

明石書店 2009年7月 422頁 6,800円＋税

「歴史は役に立たないと多くの学生は考えている。これには一理ある。なぜなら多くの場合、教えられる歴史はわれわれの世界のもつ意味も結びつきも顧みることなく、年表、年代記、偉人の業績、政治的・軍事的性格の出来事の記述であるからだ」と冒頭にあるが、本書はまさしくそれら従来の歴史教科書からの脱却を目指した構成になっている。これまでの歴史教科書は公式史観に沿いメキシコの根源を先スペイン時代に求め、メキシコ革命を賞賛することに紙数の多くを割いていたが、本書ではまず歴史学の概念と方法論を示した後、先スペイン時代から独立達成までの第Ⅰ部と、19世紀の米国とフランスの侵略、干渉があつての国民国家の形成、ディアスの時代といくつもの革命を通じての国家計画の強化、カウディーリョ間の戦い、カルデナス主義の革命後の新体制、そして1940年以降の国民統合、第二次大戦がもたらした経済の「メキシコの奇跡」、制度化された革命体制とその制度危機、新自由主義の採用、万年与党であるPRI支配体制から脱却して民主化へ移行し21世紀に入る現代までを第Ⅱ部と、全体に現代メキシコの形成過程をバランスよく記述している。

各所に重要な出来事・事項の解説、重要人物の簡略な伝記、背景等の資料に加え、自習活動課題があつて、メキシコの高校生が自国史をどのように学ぶかを知ることができ、メキシコ人のアイデンティティを理解するうえでも役立つすぐれた教科書の翻訳である。

〔桜井 敏浩〕